

鎌倉より戻つてからの義豊は、稲村城で鬱ぎ込むようになっていた。何事かを思案しては、打ち消すように頭を振る。

中里源太左衛門はすべての原因が実堯にあると、激しく非難した。

「殿は陣頭に立たずともよかつたのでは？」

実堯は苦笑した。

「人の上に立たれる御方が陣頭にあつて、はじめて人を動かすこともある。里見家は安房を支配しているのではない。在地豪族達に担がれている」

「そのようなこと」

まさに、その通りなのだ。

中里源太左衛門とて、義豊の傳役でなければ、在地豪族のひとりに過ぎない。里見家一統ならいざ知らず、総大将に引つ張つて貫わねば不安のひとつも覚えよう。

その意味でいえば、鎌倉攻めは有意義なことだった。そのことを批難するのは、筋違いである。

「しかし、結果として、殿は何かをお悩みである」

「傳役の出番と思われるが？」

「それで埒があかぬ」

「尽力召され」

実堯を責める程に、中里源太左衛門は苦しくなるのだ。大きく息を吐き、話題を変えた。

「鎌倉攻めはすべて左衛門佐（実堯）殿の筋書きであつた。殿の意思は全く汲まれてはおらぬ。そのような戦さの仕様、これまではあり得ぬ」

「在地豪族に沙汰を為されぬ殿ですからな。代わつて指図を示さねば、海賊衆とて為すべきことに困るだろう」

「殿と海賊衆の間を邪魔してはおらぬか？」

「馬鹿を申せ。殿こそ垣根を高くしておるぞ」

知らないのかと、実堯は詰つた。確かに、義豊の態度は長年そういう雰囲気だ。中里源太左衛門にさえ、どこか目線が遠いときがある。

実堯を詰つても仕方がない。

仕方がないものの、やるせない思いが蟻るば

かりだ。傳役として、己は無力、そんな苛む思いが募り、やはり誰かを責めたくなる。

このことを、同じく傳役の本間八右衛門に訴えると、彼も同意見だった。

「海賊衆は正木大膳亮の意のまま。引いてはすべて左衛門佐殿の意のままである。すなわち水軍は殿の意に沿わぬ。これがどういふことか、源太左衛門殿は解るか？」

「殿が軽んじられるということ。つまり先代よりの奉行衆が里見家を支配することとなる」

ふと、本間八右衛門は声を潜めた。

「儂は、殿が若い頃から（一統）を志していることを、聞いたことがあるのだ」

「一統」？

「在地豪族の寄騎代表ではなく、里見は安房の国主となりて豪族を支配に組み入れるのだ」

「そのようなこと」

「先代も先々代も、成し遂げられなかったことよ。それを殿はずつと考えておられたのだ」

「少し利発な御方と思つていたが、そのようなことを」

「傳役として、我らは殿の想いを遂げるお手伝いをせねばならぬ」

そうだなと、中里源太左衛門は呟いた。

となれば、最大の障壁は奉行衆の存在であり、筆頭にいる里見実堯である。

「兵を統べる者は野心を抱く。建武の世で等持院（足利尊氏）公が帝に叛いたのも、永享の大乱で関東管領が鎌倉府を討つたのも、すべて武力を頼むものの仕儀」

「うむ」

もし、実堯が取つて代わるようなことが生じたなら、義豊の味方は如何ほどのものか。

「悪い芽は、早々に除くべし」

中里源太左衛門は毅然と云い放つた。

程なく中里源太左衛門と本間八右衛門は、義豊の御傍衆に属する者たちを稲村城に招集した。「左衛門佐殿は殿に代わり、里見の実権を奪うに相違ない」

稲村城に駆けつけた烏山左近大夫時貞・小倉

民部定光・中里備中守実次・木曾修理介・真田三河守・鎌田孫六・福原丹後守に対し、ふたりは感情的に捲し立てた。

「左衛門佐殿は先般鎌倉攻めにあたり、その陣頭に殿を据えられた。諸将には評判がよかつたがのう？」

中里備中守実次が首を傾げた。

「鎌倉を焼き討ちにすることなど、世評が如何か？このことで殿の評判も悪くなる」

義豊が辱められたのだと、本間八右衛門は捲し立てた。

ここに集う多くが、義通の代に芽の出ぬ輩だ。彼らは義豊の舅でもあり、当代で立身を期待している。しかし、奉行衆が居座る限り、義豊を担いでも状況は変わらない。

実堯と奉行衆を失墜させること。

これこそ彼らの共通認識だ。

「明日も左衛門佐殿が稲村に来ることになっている」

中里源太左衛門が呟いた。

「都合がいい。稲村に乗り込んできたら、討ち取ってしまえばいい。悪しき芽を摘み取ることに躊躇などいらぬ」

鎌田孫六が息巻いた。

「待たれよ」

それを制したのは、中里備中守実次である。

「儂は先代より、この里見家を見届けてきた。

兄（実堯）に野心はないと思う」

「心外な」

「そうか。ならば明日は、儂が立ち会おう」

困惑する本間八右衛門に、中里実次は更に言葉を継いだ。

「先代より聞いたことがある。婿（義豊）殿には（一統）という虚言癖があった。里見を頂きに在地豪族を臣下掌握するお心積もりがあったと思われる」

「そのこと、儂も聞いておる」

本間八右衛門も呟いた。

「里見家が（一統）を為すためには、在地豪族の独立を奪う必要がある」

「さもありません」

福原丹後守が口を挟んだ。

「皆がそれに従うというならそれもよい。が、古河公方にも出来ぬことを、里見家に出来ると思ひませぬ」

「なにが云いたいのか」

「兄は婿殿に代わり、在地海賊衆を手懐け采配した。このことを落ち度と申すなら、御傍衆が殿を諫めることから始めねばなるまいよ」

誰も、中里実次に反論できなかつた。

十十十

相剋のはじまり（1）

夢酔 藤山